

[others]

「木村幾生先生を偲んで」

第 44 回生 西谷 源展

昭和 42 年 4 月に私は、レントゲン技術専修学校に 2 年の就学課程で入学した。当時すでに木村先生は、島津製作所中央研究所に転任されていた。しかし、何かの行事のたびには顔を見せられていた。記憶の中の最初は、全学生が顔をあわせて行われた茶話会であったと思う。講義は、X 線物理学であった。入学したころからこの授業は難しく試験でも点数がとりにくい科目として先輩の評判であった。高校時代から物理、数学、英語が苦手な私にとっては最も困った問題であった。緊張して聞く X 線物理学の講義は非常に解りやすかった。ただ、授業のときは解っているがしばらくするとさっぱり解らなくなる。これは授業の後に十分な復習を重ねることで解るようになった。これには、先生の著書である『レントゲンの取り扱い方』を毎日読むことで解決できたように思う。あれだけ苦手であった物理が、放射線に関しては好きになったのは木村先生のおかげだと思う。私の知識の根幹を成しているのがこのころの先生の授業であったと感謝している。

昭和 44 年に卒業の予定であったが、診療 X 線技師法の改正により診療放射線技師法となり教育は 3 年課程となった。そのときに特別に専攻科が設置され私は、ここで 1 年間学ぶことにした。昭和 45 年専攻科を卒業と同時に山田先生の勧めもあり専任教員の少なかった母校に残ることになった。

木村先生との交際はこの後に深まってきた。校舎が島津製作所三条工場北側の徳大寺町にあるころには、講義に来られたり、時にコーヒーを飲みを訪れておられた。しかし、木村先生とのお付き合いは、先輩諸氏と同様にお酒でもあった。飲んで酩酊状態の尺度は「こらぁ～ 西谷! おまえはなぁ～ 一杯や二杯の酒に酔いやがって・・・しっかりせい!!」という言葉が発せられるころには相当の酩酊状態である。島津製作所やその後継に常務取締役として赴任された京都科学研究所(現在の島津テクノロジー)時代には、たびたびお宅まで酩酊状態の先生とご一緒した。

現在の校舎が園部町に建設され、短期大学が設立とともに再び専任の講師として赴任されることとなった。短期大学の完成年度まで在任されたが、まさに当時の教員の中では最年長でもあり、重鎮としての存在感があった。

短期大学を退職されても絵画などの趣味を持たれ、元気に過ごされていた。私も毎年春には必ず先生の好物である山菜を持参してお宅へと伺った。そのときには、いつも学校の様子を聞かれ、心配されていた。大学設置の実現が間近になってきているときには非常に喜んでおられ、大学設置の進捗状況や教員の組織などを気にかけておられた。

最後にお会いできたのは昨年 4 月で、ご病気がちではあったが、お元気でもあり、逝去の知らせが信じられなかった。私にとって、先生の晩年には 1 年に一度お会いしていたが、毎年お会いできたことを幸せに思っている。

私の今日を創っていただいた基礎は、35 年前に教えを受けた『X 線物理』であったことを感謝しつつ、先生のご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

以上

*通巻 184 号 2007 年 7 月 10 日発行(H19-No.2)より